

社会人講師による『人生論』

—— 講義の実際と受講生の反応について ——

徳本 達夫・竹田 範子・栗生 進・原田 正治

Lecture Series on “The Art of Life” by members from the local community

—— Report on the lecture course and student evaluations ——

Tatsuo Tokumoto, Noriko Takeda, Susumu Kuriu and Shoji Harada

1. はじめに

本稿は平成5年度より広島文教女子大学に導入された『人生論』授業の実践報告である。今課題となっている大学の自己点検・評価の一環として大学教育のあり方を検討するためには、大学の構成員の間での情報の公開と共有が必要である。以下、新しい講義の導入の経移、実際の運営状況、成果、問題点、課題を示し、より優れた『人生論』講義を創り出す一助としたい。

2. カリキュラム改革と『人生論』

1991年7月、大学審議会による大学設置基準改訂の答申がなされ、これまでの大学教育に関する種々の規制が大幅に緩和され各大学の独自性を活かしたカリキュラムが組めるようになった。一方、18才人口が1992年をピーク（205万人）として後は減少の一途をたどり、大学は「冬の時代」に入ると言われている。いまや大学は「象牙の塔」などといって社会から遊離した存在ではあり得ず「開かれた大学」を目指して生涯教育や社会人の再教育などを含めて魅力ある大学作りを始めようとしている。こうした状況の中で各大学とりわけ私立大学は競って新しいカリキュラムを組み始めている所が多い。広島文教女子大学では大学審議会の動向を先取りして平成4年度からの新カリキュラム移行を目指して1990年からカリキュラム改訂の準備を進めてきた。これまでの一般教育を改訂する計画の中から、大学の教育方針である“育心育人”（こころを育て人を育てる）に添ったものとして『人間科学入門』や『人生論』が生まれしてきた。『人間科学入門』は「人間性とはなにか」という主題について様々な学問領域から考えることを目指しており、学長を始め学内の教授陣による講義で基礎教育科目に入る。一方、『人生論』は社会で活躍中の方を講師に迎えて、その迫力ある生き方に学ぶとともに、地域社会との交流をも目指すものであり、生涯教育科目に入る。講師を広く学外から選んだのは実社会への出口に立つ学生に多様な人生を生きておられる講師から立派な社会人として生きて行く心得などを話していただくためである。こうした試みは積極的な考え方をすれば地域で著名な講師に本学の学生を知っていただき、世間から認めてもらう良いチャンスであると言える。一方、消極的な考えでは講師の前で学生が失礼をして評判を落とすようなことになるのではないかと危惧するむきもあろう。しかし仮に恥をかくようなことがあったとしても、それが現実であれば仕方のないことで今後改めるように教育しよう、世間の評価を恐れて逃げるのは止めよ

う、という考えで『人生論』をスタートさせることとなった。

3. 『人生論』の開講まで

こうして『人生論』は、平成5年度から食物栄養学科を除く短期大学部2年生を対象として前期(2単位)の講義(選択科目)として開講されることになり、その計画と運営は教務委員の中から我々4人に任され、1992年9月よりまず講師を探すことから始めることになった。全学の教官に講義の主旨を説明し候補者の推薦を依頼したところ、40名ほどの候補者が揃った。マスコミで良く名前の知られた方からあまり目立たない場所で働いておられる方まで、また仕事の分野も、教育、実業界、宗教、文化、医学、など様々であった。候補者の一覧表を作り、本学に来ていただけるか、その方の『人生論』が本学の女子学生にとって適当であるか、分野は偏らないか、女性の講師も多くしたい、などの条件に添って選考し、12名の候補者が決まった。

新学期からの『人生論』開講を控えた後期末に、受講生の数と意識を調査するため、受講対象の学生にアンケートを取った。377名に配付し352名から次のような回答を得た。すなわち、① ぜひ受講したい 39名(11%) ② できれば受講したい 143名(41%) ③ 場合によっては受講する 161名(46%) ④ 受講しない 9名(2%)であった。アンケート実施の3カ月後に正式な履修届を提出したものは144名であったことから推測すると、この中で①および②と答えた学生が実際に受講したとみなして良いであろう。④のように拒否した者はともかくとして③は「体よく断わった」と見ることができ、これに準じて学生の意志表示も少しトーンダウンして読み直してみる必要がある。(①+②)の中での①、つまり受講者の中で約20%が『人生論』にかなりの期待をもって臨んだと見なされる。一方、残りの80%の学生はあまり大きな期待を寄せていなかったようである。

4. 『人生論』講義の実際

講義は4月24日から7月10日までの土曜日3-4時限に行われた。第1講は開講記念の特別公開講座として講師の絵本の即売会なども行った。全学的な広報の効果もあって、会場の大講義室に学生と教職員合わせて350人近くの出席を得た。2講目以降は中講義室で行い、就職試験や実習のための欠席を除くと平均出席率は80%以上で、予想以上の好成績であった。各回の

『人生論』講義の進行計画 平成5年度『人生論』世話人会(原田、栗生、竹田、徳本)

	(世話人の仕事)	(副手の仕事)
10:30	講師を応接室に迎えに行く。 10:40までに教室へ案内する。	受講生を前から着席させる。 教室の入口で感想兼出席カードを配付し受講者数を数える。 授業開始で前半の仕事は終了
10:40-10:42	講師の簡単な紹介。	
10:42-11:50	講師の話	
11:50-11:57	質問があれば受ける。(適当な時間で打ち切る)	11:50教室に戻る。講師退場の後感想を書かせる。書き終わった学生は学科別のかごに出して静かに退室。担当者と出欠を名簿に記入して全仕事終了。
11:57-12:00	学生代表謝辞。(前もって頼んでおく。1, 2分) 全員の拍手	
12:00-12:10	講師退場。応接室まで送る。	

講義は以下に示すような計画に添って進行した。講義終了後、学生代表に謝辞を述べさせた。感想レポートはB5版の用紙に書かせ成績評価ならびに出欠調査に用いた。またレポートには授業に対する要望や苦情を書く欄を設け、ここで出された意見で取り入れられるものがあれば早速実行に移すように心がけた。

5. 各回の講義の概要と学生の感想

第1講 「お母さんはドラマチック！」 はらみちを先生（画家）

脳性小児まひのため生れつき手足が不自由で母に背負われて幼少時代を過ごした。8歳で父を失い、母は父親の役目もつとめた。学校という初めて体験する社会の中で、みんなとどうしたら友達になれるかを考え、体は不自由だが勉強や絵が得意でみんなの人気者になった。校庭を母親が肥たごをかついで横切っていくのを「恥ずかしい」と言ったとき、母親が初めて見せた怒りに驚くとともにそこに広い愛情を感じた。母は高齢となって入院後、言葉を失っても指文字で我が子と交流しようとしていた。最後まで気にしていたのが障害を持って生まれた自分であった。

受講生の感想：「障害者は何も特別な人ではない。体のハンディはあるものの、それを逆に自分の人生に生かしているすばらしい。」母の愛が随所で語られたが、最も印象に残ったのは肥えたごの話だった。「私の育てているのはお前だけではない。土から栄養をとって育ていく大根やじゃがいもなども私の子供なんだ。」と自信を持って言い返した母親の偉大さ、優しさ、愛情がよく分かる。「すべてのものへ向けられた優しい慈悲のまなごしが温かい。先生の絵にも感じられる生きている躍動感のような力強さの源はお母さんへの賛歌に通じているようだ。」そうした生命力について「土にまみれて遊んだ子ども時代を持つものなら、周囲にあるありのままの生命たちに支えられて初めて生きていられることが実感でき、その時が一番幸せなのではないか。」と書く学生もあった。

第2講 「人との関わりから学ぶ」 木原洋子先生（貴船原少女苑苑長）

最初のボランティアで福祉施設に行った時、子供の人なつっこさに感激し社会福祉の道に進んだ。非行に走った少女との関わりの中で、少女達が自分の弱さ脆さに気付いて始めてその環境から抜け出すことができることなどを学んだ。自分でも世の中の役に立つという経験や人から感謝されるという体験が生きる支えになる。頑張る対象としての生活目標をもつことが重要で何でもやってみればその経験が自信になって次の目標につながるものである。

受講生の感想：「つらい思いをした人は普通の人より多くの勉強をしているのだからプラスになることも多いと思います。人との関わりから学ぶことは、生きていく上で一番自分にプラスになるものだと思います。」と友人関係などで悩んだ体験を語る学生。「先生の言われた『ボランティアは自分のためにする』を頭において、これからも私の小さな力を少しずつ役立てていけたらいいと思います」のようにボランティアや社会福祉に進みたいという感想もある。就職活動の最中の学生は「就職に関しても『自分のやりたいことをやりなさい』という言葉に励まされる。今からでは時間が足りないかもしれないが、自分の目標を見つけ、少しでも近づけるよう頑張りたい。」と現状に結び付けている。

第3講 「紙芝居でこんにちは」 小梶義忠先生（会社員、紙芝居一人座）

教育実習で紙芝居を用いた授業をやったら好評で、以来、近所で紙芝居の上演を続けているが、子供との出会いがその活動の支えとなっている。紙芝居の歴史を映像を交えつつ紹介し、「黄金バット」をはじめとする戦前戦後の作品、自作作品などを20年の体験をもとにした実

演を交えて講義された。また社会人としての心構えとして「働くとは傍（はた）のひとを楽にすることであり、楽しいことは長続きすること」などを強調された。

受講生の感想：教室の床に敷物を敷いて何人かの学生を座らせての実演を交えた講義は好評であった。「紙芝居一筋に生きてきたという印象を受けた。生き方が素朴でまっすぐだ。汚れの無い純粋な気持をもち続けることができる人が紙芝居をするのに向いているように思った。」「幼稚園に戻ったような感じがして大変感動した。この時間は現代ではなかったような気がする。」幼児教育学科の学生は「保育の上で紙芝居は大切な道具の一つだと思っていたが、単なる道具とは思えなくなった。動くはずもないのに絵が動いているような気がしたし、その情景が鮮明に浮かび上がってくるのがおもしろかったし、すごかった。」と強烈な印象を受けた。

第4講 「料理ひとすじ」 木川 武先生（元国際ホテル料理長）

自分に一番似合った服装でと、まっ白なコックさんの服装で講演された。調理師の道に入ったきっかけ、きびしい修業のこと、目標に向かって進まれた経過を話され、料理を核に、さまざまな人生訓を展開された。「おいしい料理は優しい心を作る」、「料理は目、耳、鼻で食べる」、「料理を作る時は素材に見られている」、「心があれば形はできる」、「愛情のこもった料理＝気配りを形に表す」、「プロは料理を技で作る、アマチュアは心で作る」、「料理は生きもの、一度の出会い」

受講生の感想：「料理ひとすじに生きて来られた自信と誇りを感じた。」、「先生のお若い頃からの料理に対する積極的な向上心が、努力する中で、“愛情”や“思いやり”や“出会い”などを生み出したのだろうと思う。私も自分の人生が有意義なものであるよう、日々“努力していく心”を大切にしたい。そして自分なりの花を咲かせたい。」と努力すること、ひとすじに打ち込むことの重要性を受け止めている。「幼児教育者を目指す自分としては、素材を生かした料理をするように、子供たちの個性、本質を生かすことのできる指導者になりたいと思う。人生と料理はまさしく同じものであると思う。」と自分の進む道に取り込んでいる学生もいる。また自炊をしている学生は、「気持ちの入れ方で料理はおいしくもなるしまずくもなる。怒って料理を作ると味付けがからくなる。」など料理のコツも印象に残ったようである。

第5講 「人生で一番大切なもの」 大江寛人先生（日本アライアンス教会牧師）

牧師になってブラジルへ向かう船での渡航が、同じ苦しみを味わった日系一世の人たちとの共通の体験となって、その後の布教活動がうまくいったことなど、人生で節目となった出来事を話された。「人間として生まれてきた意義と自分の存在に意味を持たせるために一生懸命生きなさい。」と受講生を励まされた。

受講生の感想：「自分のやること全てに意味があることをいつも頭におき、何事にも積極的に生きて行こうと心にきめました。」、「私の後ろ向きの考え方が少し前に向いたような気がします。現在自分の置かれている状況に感謝できるような生き方をして行きたいと思います。」「積極的と言えば、自分に無理をさせることだと思います。でも、先生のお話を伺い、ずいぶん気が楽になりました。その状況の中で、自分にできる事は何であるのか？どうすることが一番良いことなのかを考えることの大切さを学びました。」プラス指向の生き方は若者の心をつらえたようである。

第6講 「家庭と企業経営の両立」 豊口澄江先生（㈱ビアン専務取締役）

企業のキーバランチ部門のスーパーバイザーを退職して情報処理の会社を経営、事業を拡張するにつれて母親としての責任を果たす事の苦しさや経営者としての大きな仕事の達成感を味わった。女性だからできたことを大切にして、働く女性に自分と同じ苦しみを味わわなくても

よいような職場を作るための努力をしてきた。

受講生の感想：「自立した女性になりたい。主婦、妻、母親、そして個人としてそれぞれのバランスをとって生活することは並大抵の努力ではできないことだと思いました。私の母も働いていて、子育てに十分手が回らなかったと今でも悔やんでいるようです。でも私は休日でも仕事をしていた母を尊敬しています。」「頼れる人という感じがにじみでている方だなど思った。企業経営の上では順調に成功されたが、母親という面でのつらさは痛いほどわかった。」「これから社会に出ていくうえで、本当に参考になった。女性が結婚、出産、子育てをしながらか働くことはとても大変なことだと思っていたが、先生の体験談を聞き、その立場に立たなくては分からない苦悩があることを知った。」社会への出口に立つ女子学生にとって有益な話であった。

第7講 「アジア・日本・そしてヒロシマ」 大牟田稔先生（広島平和文化センター理事長）

「豊さ」とは何かをアジア、日本、そしてヒロシマと関連して語られた。戦前の大東亜共栄圏という思想を知らずしてアジアの人たちとお付き合いはできない。日本がアジアの国々と真に手をつなぐためには何をすべきか。若者の責任は大きい、その若者が自信を喪失しているようだ。自分に課題を課し、やりたいことを見つけて学んで行こうとすることが必要である。さらにヒロシマについては、人間が人間を殺すことの意味を考えてほしいと話された。

受講生の感想：「世界に目を向けることの大切さに気付かされた」者が多い。「歴史を試験問題の穴ウメ式に教えられ学んできたように思います。またヒロシマについても同じことがいえ、大人も『若い人には言っても分からない』とあきらめて放り出している部分もある。」と自分がこれまで学んで来た歴史の授業批判もあった。「国際化とはどういうことなのか改めて知らされた。自分は、政治や世界情勢などに無知であり、また無視した生活を送って来たように思う。日本について一人一人がきちんと自分の意見を持ち真剣に考えるようになることを目指すような教育によって社会は変わって行くのではないか。」このように自国の歴史に無知であることを反省するものが多かった。

第8講 「キラキラと輝きたい貴女へ」 田辺怜子先生（広島県青少年女性課長）

自分が現職に至るまでの過程では、女性の管理職への登用はほとんどない旧来の社会制度で、女性が職業を持つことは個人の勝手であるという風潮であったが、現在は「男女共同参画型社会」の考え方がすすめられている。そのためには、男性は生活的自立、女性は経済的自立が必要ではないか。人の究極の幸せは、好きなように時間、空間、経済を自己決定することである。社会に出てキャリアウーマンとしての貴女を輝かせるのは「3気」（ヤル気、コン気、ノン気）ではないかと提言された。

受講生の感想：「女として、一個の人間として、一つの最終地点ばかりを見るのではなく、その過程を長い目で見て、自分の自由を自分の力で作っていく決定力、強い意志、そして堅くならない楽天性を伸ばしていく努力をしていけば、幸せに輝けるような気持ちになった。元気の出るお話が聞けて良かった。」と「3気」に共感した感想が多い。性差別、男女平等についての感想も多かったがその内容は異なる。「男女差別の経験がないし、あまり考えたことがない。」と書いた者23人、「女性も男性も同じように能力を発揮できる社会を作っていくことがこれからの課題である。」と差別を認め、自分の意見や感想を書いた者も23人、また「男と女の役割というものがあると思うから、なんでもかんでも平等を唱えるのも考えものだと思う。」と書いた者も14人あった。さらに「専業主婦は社会貢献していないかのように感じられた。」と批判的な意見も14人あった。

第9講 「生きることのすばらしさ」 沼田鈴子先生（原爆語り部）

戦争で婚約者をなくされたこと、人の優しい心を変えてしまう戦争の恐ろしさ、原爆が投下された日の様子、被爆後片足切断によって助かったこと、その後の立ち直りのまでのこと、その時の両親のかかわり方、語り部として活動され始めたきっかけや活動を通してのいろいろな出会いなどを、やさしい語り口で話された。戦争での犬死でなく人間らしい死を迎えたい。そのための平和は、一人一人を大切に作る心、やさしさ、笑顔、挨拶から生まれるとして、日々の生活での心得を話された。

受講生の感想：原爆、戦争、平和について改めて考えたという人が多い。「私達にとって原爆あるいは戦争という事実は、とても遠いことのようになっています。しかし沼田先生のように経験された方々の話を精一杯受け止めることで、自らの感受性を鋭くし、人間として成長できると思います」。また人間らしく生きること、命の尊さを受け止めたものも多い。「一つしかない命をもった以上、その命をいかにして実のあるものにしていくか、大切にしていくかを今日教えられた。生きているからこそできるものを見つけ、生きていてほんとうによかったと思うことができるような人間になりたい。また生きていることの喜びは自分だけでなくまわりの人からも与えられるものだと知った。」受講生と同じ年頃の悲惨な体験談であっただけに強い印象を与えたようである。

第10講 「よき師（人）よき本との出会い」 神田三亀男先生（民俗学者）

学生時代にお姉さんの読んでいた雑誌をみて和歌を作る事に興味を覚え、後に佐々木信綱先生とのお付き合いができた。柳田国男の民俗学事典を読んで食文化の研究を始めた。今和次郎の「途上採集」に触発されて、「歩く、見る、聞く、書く」ことを常に行っている。生活信条は「仕事を通じて自己を充実する一生を送る。」である。

受講生の感想：「私なりに『よき人、よき本』との出会いを大切にし、これからの人生に役立てたい。」「頼まれれば断らないということは、すごい事だと思いました。私は頼まれても嫌なことであればすぐ断ってしまいます。広い心で、すべて受け入れる事ができればすばらしいことだと思いました。」「自分の一生の生き方を決めるのはほんのささいなきっかけ、出会いによるものだということを学んだような気がします。このことは私に『生活している中で、無意味なことはない。一日一日のちょっとしたこと、自分の心を打ったことが人生での一つの出会いになるんだ』ということを考えさせられました。」など、共感する意見が多かった。

第11講 「外から見た日本」 伊藤 喬先生（㈱西川化成常務取締役）

東洋工業へ入社した頃から、平和公園で岩国基地の兵隊に広島を案内しながら英語を話す経験を積んだ。日本の自動車も海外でも生産されるようになって、東南アジア、米国で工場の経営をすることになり長い海外生活を送った。そこでは日本の常識が通用しないことが多い。冷静に考えると海外の常識のほうが正しいのではないかと思われることも多い。

受講生の感想：「日本は家族同士の付き合いが少ないとか、物価が高いとか外国と比べるとよくない面が多い事を知りました。私には愛国心があるかと考えるとあまりないと思います。自分の住んでいる国だから、もっと誇りをもてるように、日本のことをよく知るべきだと思いました。」「先生は国際人でありながら、その人たちにありがちな外国崇拜主義者でなく、日本の良さを大変認識されており、本当に日本を愛しているのだなと感動しました。自国を愛してこそ真の国際人なのだと思います。」などという意見から「英文科に学ぶ学生として英語を話せるようになるコツを学んだ。」と書く者もいた。

第12講 「登山と私」 種村重明先生（前祇園北高校長）

豊富な登山体験から人生を語りはじめ最後には文明論にまでつながった。野生であることの

重要性は再認識されてよい。子供の頃の自然体験の不足や近年の便利な生活の中で人間は本来持っている動物勘を失いつつあるのではないか。登山は計画、準備の段階から楽しみがある。登山は自分で歩く行為であり、自己との対話を通して自律心を育てる。即座な状況判断によって危険を予知しながらの活動である。それは無償の行為であることが本質である。個人個人が的確な役割を果たすことが真のチームプレーになる。登山と人生とを対比させての話であった。

受講生の感想：「登山に対して、少し陰気なイメージしか持っていなかったが、実は私達が一番とっつきやすく奥の深いスポーツであることに気づかされた。」、「登山は自分との競争であり、自分の能力に合わせてすると言われた。私たちは自分と競争することは極力しないようにしている。自分の安全や安楽の方へ走るからだ。」などのように登山の意義に触れた感想が多かった。

6. 『人生論』から学んだこと——受講生の最終レポート

12回の講義が終わった後、“『人生論』から私が学んだこと”と題して最終レポートを課した。143名のレポートはたった5行のものから50行以上にわたって書かれたものまでであり、その内容も多岐にわたっている。しかし取り上げられている事項の共通点をまとめると以下のようになり、今回の『人生論』を学生がどのように受けとめたかが明らかになる。

『人生論』を受講する前は「難しそうだし他人の生き方なんて自分とは関係ない。」とあまり期待することもなく、ただ単位取得のために履修することにした者がかなりの数にのぼった。しかし、前に示した第1講の受講生の感想にも見られるように、講義が始まってすぐに多くの学生が『人生論』に引き込まれて行った。講師の方々は大なり小なり様々なハンディを持っておられながら屈することなく逆にそれをプラスに変えて力強く生きてこられたような話が共通基盤としてあった。こうした話を聴いて受講生は「これまで自分は『なんとなくさ』といった甘い考えでいたり、困難に出会うと『どうせダメなんだ』と消極的な態度で生きてきたのではないか。」「自分の人生についてこれまで考えてみたことなどあったらどうか？」と自分の生き方に思いを寄せ始めている。現実の問題として就職探しを始めてみると、今年は例年になく厳しい状況であり、講師の生きてこられた時代の厳しさもよく分かる。そして目の前の苦しみから逃げることはばかり考えないでそれに耐えて行く勇気を『人生論』の講師の話から得ている。それにしてもいざ社会への出口を探すとすると、女性としての生き方、女性差別などの厳しい現実におつかり女性講師の話されることばがひしひしと身にしみるようである。こうした現実を前にすると、つい自分の夢や人生の目標をなくしてしまいそうになる。そのとき、「『人生論』の先生方はどうしてどの人もあんなに輝いた表情をされているのだろうか？」と考え、それが「人生においてしっかりした目標を持ち続けて努力された結果である。」ことに気づくのである。もちろん、受講生の全てが講師の話にいつも従順であったわけではない。「先生の生き方は立派で取り入れたい所も多いが自分には自分の生き方がある。それは自分自身で作りに上げて行くものだ。」などの意見に見られるような聴きかたをする者も少なくなかった。その他、日頃あまり考えたことのなかった「国際社会における日本人の生き方」とか「広島に学ぶ学生として原爆の悲惨さと平和の尊さを教えていただいたこと」は心に残ったようである。「12回の講義を通して具体的にこれを得ましたとは言えないが、きっとこれからの自分の人生でふとした時に思い出すであろう。』『人生論』のひとつまが数々ある。最終回の講義が終わった今「受講してよかった。後輩のためにもぜひ今後とも続けて欲しい。」と願っている学生が多かった。

7. 感想レポートと講師の反応

感想レポートは担当者がその全てに目を通して、良く書けているもの（通常およそ半数）をコピーして冊子とし、「□□先生講義感想文集」のタイトルをつけて講師の先生にお送りした。学生達の「声」を直接届けたいと思ったからである。この感想文集を先生方がどのように読まれたか、後日いただいた手紙の一部を引用してみる。はら先生はそれを「ずっしり熱い心の花束です。」と表現され、小梶先生は「宝物です、これからもガンバルゾと勇気が湧いてきました。」とまで書いていただいた。またほとんどの先生方が共通して「学生の皆さんが講師の話の的確に聴き留めていることに感心しました。」と述べられている。伊藤先生などは「感想文のひとつひとつに返事を書かねば気が済まないという気持ち」になられて、後日ワープロで打った署名入りのコメントを送っていただいた。そこで該当のレポートを探し出しコメントを添付して学生に届けたが、こうした講師の熱意は『人生論』の余韻として受講生の心に長い間響いたようである。なお先生方からいただいた手紙は掲示して学生達にも読ませた。おたよりを読むと先生方はかなりの社交辞令を差し引いても当大学の学生達を高く評価して下さっていることが分かる。こうして少しずつではあるが社会からの評価を受ければ、我々はそれにふさわしくありたいとの思いが改めて生じてくるだろう。今回このような社会人講師と受講生との交流が生まれたことは、どちらの側にとっても生きて行く上での大きな励みとなるものであり、これこそ我々が当初から目指していた本講義の目標の一つであった。この講義におけるこうした相互作用は教育的な面から見ても興味ある結果を生んで大きな収穫があった。

8. 『人生論』講義の評価と問題点・課題

最終講義の後、アンケートを配付し、今回の講義を受講生のみで評価させた。（回答者数は96名）。結果として、まず授業全体への評価は、5段階評価で、5；27名（28%）、4；44名（46%）、3；20名（21%）、2；5名（5%）、1；0名（0%）であった。この講義を開始する前の期待度からすれば、受講生は期待していた以上のものを学んで有意義であったと評価しているようである。また受講生の成績を同じように自己評価させると、5；29名（30%）、4；37名（39%）、3；27名（28%）、2；2名（2%）、1；0名（0%）であった。授業への評価の高さとほぼ比例した数字であり、熱心な講師の話に惹かれて自己評価も高くなったと見られる。

さて『人生論』は全て順調にあって成功したようなことばかり書いてきたがもちろん失敗や問題点、反省点は数々ある。問題点の一つは受講生の受講態度である。遅刻入場、講義中の私語、居眠り、内職などを始めとしてレポートの代筆まであったことは事実である。とりわけ遅刻と私語には悩まされた。授業の前に何回か注意したがそれだけではおさまらなかった。そこである時期から30分以上の遅刻者をシャットアウトすることにした。この授業だけのためにやってきてシャットアウトされた学生の中には、廊下に立ったままドアの間からもれてくる講師の話に耳を傾ける者もあつたりして、心優しい世話人がそっと入れてやるという一幕もあった。授業中の私語については熱心に聴講している学生の中からも批判の声があり、担当者としてもその対策に大いに苦慮した。「私語は講師に対する最大の侮辱である」ことは何度も学生に伝えたがなかなか改まらなかった。しかし遅刻者を締めだしたら随分少なくなったようである。次に出席率と成績評価について述べたい。『人生論』の成績を何で評価するか。ただ単に出席率だけによる評価はあまりに問題がある。かといって毎回のレポートを読んで評価に加え

るというも、言葉で表現する能力にたけていればそれでよいのかというような問題があろう。理屈の上では受講生が『人生論』で学んだものを彼らの今後の生き方の中でどう活かしてくれるかであり、彼ら自身で自己評価すべきものであろう。『人生論』の成績評価法は今後の課題として残った。さらに、受講生からしばしば出た苦情として講義時間の延長がある。担当者としては、各講師に前もってこの点をよくお願いしてきたが、講師の熱意と若者への期待が結果として時間延長を招くこともあった。時間内での運用法の工夫も今後の課題である。ところで本講義は今期が初めてということもあって、全ての仕事を担当者のみでやったため行き届かない点も多々あった。今後、この授業の展開に関して提言したいのは、受講生に、授業の前に黒板を拭く、教室の掃除をする、講義の後に教室の窓を閉める、ごみの始末をするなどをさせてはどうだろうということである。今回の授業では講義終了後の講師へのお礼の言葉を学生代表にやらせたが、みんなその役割を十分に果たしてくれた。このことから分かるように、少なくともこの授業では学生をお客様扱いしないで「担当者とともに授業を作り講師から学ぶ」という姿勢を作っていくべきだと思う。『人生論』で学んだことは早速自分で実行してこそ身につくものであると信ずるからである。

9. お わ り に

本稿の始めにも書いたように『人生論』を始める前には関係者の多くが「うちの学生が失礼することなく社会人の先生方の講義を聴くだろうか？」という心配をしていた。失礼が皆無であったとは言えないが全体として学生達は予想以上に真面目にこの講義に取り組んでくれた。講義後にレポートを読む度に「この企画をやって良かった。」との思いに包まれた。ある意味では一方の主演であった今回の受講生を誉めてやりたい。今回の講義で我々は、傍聴させてもらうことで大いに勉強になったが、同時に教育に携わる者として受講生からも多くのことを学んだように思う。中でも、「要望欄に書いたことが次の週から実行されるようになったことには感動した。教卓の生花がとてもきれいだった。毎回の毛筆による看板やテーマ書きなど、担当者の熱心さがうかがわれた。」という意見に見られるように、講義を提供する側がエネルギー（熱意）をつぎ込めば学生達もそれに応えてくれるということを改めて信じていくことができたのはうれしかった。そういう意味からすれば、『人生論』のお世話をさせていただいた我々が案外一番大きな勉強をさせていただいたのではあるまいかとも思っている。『人生論』は来年度からは大学3年生にも開講されることになっている。すばらしい講義がますます多くの学生に聴いてもらえるのは喜ばしいことである。『人生論』が文教生の人生の糧となる講義となることを信じてやまない。

謝 辞

一連の『人生論』関連の仕事が終った今、我々は肩の荷が降りた思いがしている。この講義を作って下さった、12名の講師の先生方、友瀧（元）課長を始めとする教務課の方々、毎回の看板に筆をとっていただいた山科総務課長、講師を紹介して下さった先生方、授業運営の上でお手伝いいただいた副手の方々、に対して心よりお礼申し上げます。

—平成5年9月30日 受理—